



## 熊対策に、AIがもたらす“安心”を

アツミ電気株式会社 営業本部長 鈴田 浩司



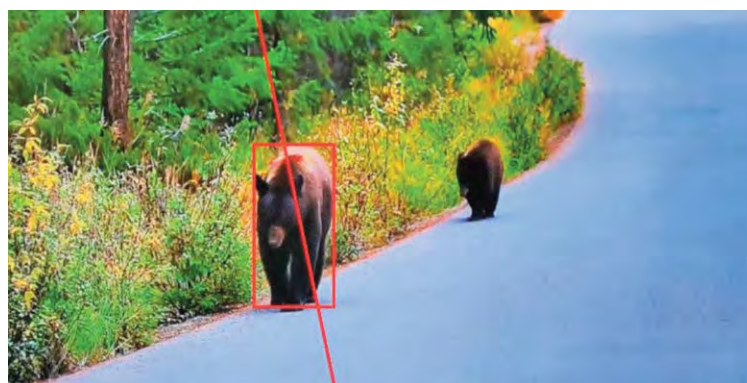
新年、皆さまにご挨拶申し上げます。いつもアツミ電気をご支援いただき、誠にありがとうございます。  
本日は、私どもがこのたび発表いたしました「動物検知AIカメラによる熊検知・自動発報システム」について、ご紹介とともに、その想いをお伝えしたく筆を執りました。

### ◆なぜ今、熊対策か

野生動物のニュースに触れる機会が、ここ数年で急激に増えたと感じている方は多いのではないのでしょうか。特に熊の出没は年ごとに深刻度を増し、都市部に近い地域でも報告されるようになりました。山林の環境変化や人里への食料依存など、複合的な要因が指摘されていますが、いずれにしても「これまで安全だと思われてきた場所」で遭遇リスクが高まっていることは確かです。

こうした状況の中で、「住民をどう守るか」「どう早く気づき、どう動くか」という問いは、自治体・教育機関・商業施設・農業従事者などさまざまな立場の方々にとって避けて通れない課題になりました。しかし、これらの対策は決して単純ではありません。熊対策は人命が関わるため判断を誤れませんし、対策を講じる側の負担も決して軽くありません。しかも人員不足は全国的な問題で、あらゆる場面で「監視の目」が足りていません。

そうした現場の声を受け、私たちアツミ電気では、AI防犯カメラと警報機器を組み合わせ、より実用的で“現場が扱える形”のソリューションを提案する取り組みを進めています。あくまで核である防犯カメラにこだわり、「動物検知」というオプション的価値を付け加えるというスタンスで、導入後のサポート、現場環境に合わせた設計、既存設備との連動など、実際に動く仕組みを作る部分こそが私たちが最も力を入れている部分です。



近年のAIカメラは、人や車だけでなく、熊・鹿・サル・鳥・犬・猫といった複数の動物を識別し、設定した条件に応じてアラームを発することができるようになってきました。ただし、暗所・雨・霧・逆光・物陰などの環境要因によって精度が低下することもあり、動物検知を“完全に任せられる装置”ではありません。

そのため、あくまで防犯カメラとしての役割を軸にしつつ、「動物の接近に早めに気づく補助的な仕組み」として活用していただくことを前提としています。私たちが提供したいのは、危険の兆候に気づく可能性を高め、現場での判断材料を増やすための現実的なシステムであり、「AIがすべてを解決してくれる魔法の装置」ではありません。

#### ◆動物検知AIカメラとは

では実際にどのような動作をするのか。AIカメラが対象を検知するとカメラ本体から「接点出力」が出ます。これは非常に汎用性が高く、警報器、警告ブザー、威嚇スピーカー、照明、表示灯など、さまざまな外部機器を作動させることができます。「動作したら見に行く」ではなく、「自動で音を鳴らし、光らせ、知らせる」ことが可能になります。

さらにメールによる通知機能も備えており、担当者のスマートフォンやパソコンに検知情報を送信できます。将来的にはLINE通知への対応も検討しており、より直感的で日常的なツールを活かした運用ができるようにしたいと考えています。遠隔地からリアルタイム映像を確認できるため、「誤検知か、実際の接近か」をその場にいらなくても判断できる点は、過疎地域や人手不足の地域で特に役立つ機能です。

また、AIカメラは「対象が視野内にいるだけ」ではアラームを出しません。「ライン越え」「エリア侵入」「動作検知」など、行動に基づいて警告を出すよう設定できます。例えば、動物が遠くを横切っただけではアラームを出さず、指定エリアに入った瞬間に出力する、といったことが可能です。これにより誤報を減らし、必要なときだけ動作する実効性の高い監視体制が構築できます。

#### ◆多様な導入シーンとその効果想定

では、このシステムはどのような現場で求められているのでしょうか。

自治体・役場では、山間部の道路、集落入口、通学路近くなど、日々巡回しきれない場所の補完として期待されています。住民からの通報だけに頼らず、AIからの通知が“もう一つの目”として働くことで、迅速で正確な対応に繋がります。

学校・教育機関では、子どもたちが安心して登下校できる環境づくりが重要です。夜間の校舎背面やグラウンド周辺は死角になりやすいため、人・動物どちらであっても接近情報を早期に得られることは大きなメリットです。

商業施設や店舗では、駐車場や搬入口裏のように、普段は人が立ち入らないエリアの監視ニーズがあります。夜間の侵入や野生動物の接近は、施設の安全性に直結します。

農地・果樹園では、シカやイノシシ、サルによる被害が深刻化しています。昼夜を問わず作物を守る必要があり、AIカメラと外部警報機器の組み合わせによって“早期警戒システム”の役割を果たすことができます。

キャンプ場・宿泊施設では、利用者が安心して滞在できる環境づくりが不可欠です。夜間の熊の接近にいち早く気づける体制は、施設運営者にとって大きな安心材料になります。

そしてゴミ捨て場。これは意外と多い相談で、カラスや小動物による荒らしを検知し、清掃負担の軽減や衛生面の改善に役立てたいというニーズがあります。

こうして見てみると、動物検知の用途は決して“熊対策”にとどまらず、地域の生活圏の多くに潜んでいた課題に応える仕組みであることが分かります。

私たちアツミ電気の強みは、導入後の運用を見据えた設計力と、現場ごとの事情を丁寧に汲み取ることにあります。AIカメラを置くだけでは十分に機能しません。見通し、影、設置高さ、角度、外光、季節による環境変化…こうした要素を総合的に見極めることで、誤報を抑え、実効性を高めることができます。また、接点出力をどの機器につなげ、どのタイミングでどう動かすのかといった“運用デザイン”も、安全対策の成否を左右します。

システム導入は「設置して終わり」ではありません。運用してはじめて価値が生まれます。だからこそ私たちは、お客様の現場に合った形での提案を大切に、導入後も改善が続けられるサポートを提供しています。

AI技術が進化し続けるなかで、私たちはこれからも地域の安全に貢献できる仕組みづくりを模索していきます。万能ではない。けれど、確実に現場の負担を減らし、気づきを増やし、人の安全を守る一助になる。その“現実的で使えるAI”を、これからも丁寧に届けていきたいと私たちアツミ電気は思っています。

